

九谷焼に西洋のイメージ取り入れ 著名な「物語」を作品に表現

上端 伸也(かんばた・しんや)さん
石川／九谷焼作家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くま蒙の生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARTAクリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREALAGE代表取締役社長「デザイナ」)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。



1月24日、プレゼンテーションにて

「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。石川県選出の匠、九谷焼作家の上端伸也さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

「九谷焼ボンボンニール」 地元の伝統工芸 魅力を伝えたい



九谷焼にはかかせないろくろ

上端さんは、石川県立工業高校工芸科、石川県立九谷焼技術研修所で陶芸を学んだ。卒業後、九谷焼窯元に11年間勤務、2016年に独立し、自宅で制作活動に入った。石川県の伝統工芸・九谷焼の技法を活かしつつ、それとは味違ったオリジナルの作風を積極的に追求する。九谷焼に西洋の感性やイメージを取り入れることで、異国情緒を感じさせる作品を生み出している。

九谷焼は基本的に分業制が多いが、上端さんは自分の個性を出すために、ろくろ成形から絵付けまで全て自分で一貫制作する(イベントやコラボレーションなど一部除く)。つや消しの釉薬を施し、通常の九谷焼とは異なり、還元焼成をせずに酸化焼成する。これにより素地の色が九谷焼によくみられる青白いグレーがかつた色ではなく、優しいアイボリー色に仕上がる。その独特の素地に「葡萄茶」(えびぢゃ)という旧表記をあえて使い、



繊細さが求められる絵付け作業

それを踏まえた上で、自分だけが、こういう表現もできるんじゃないだろうか」と意図を解説する。今回のプロダクトは、最初、どうしたらいいか全くわからない状況からのスタートだった。



完成プロダクト「ボンボンニール」

ただけ決めていたのは、九谷焼をどういう風にアピールすれば、もっと知ってもらえるかということだった。キックオフセッションに代表的な作品を何点か持って行った。作品を見た下川氏から「デザインに物語性があるとおもしろいね」とアドバイスされた。九谷焼と物語をどう結び付けようか、というところから考えを巡らせた。本を読むことが苦手で、

は皇室の引出物(記念品)として意匠を凝らした菓子器としても知られる。

全然本を読まなかったが、制作のためにさまざまな本を読んだ。自分の作品のテイストの中に、物語を連想させるイメージを取り入れ、その物語を感じてもらおう風にしたと思った。蓋(ふた)を開ける動作が本のページをめくる動作を連想させ、物語を読み進めるようなイメージで制作した。完成したのが「九谷焼ボンボンニール」だ。ボンボンニールは、フランス語でボンボン(砂糖菓子)を入れる菓子器で、日本で

「銀河鉄道の夜」と「星の王子さま」の2つ。各2点計4点を制作した。物語の心に残る言葉や情景と自分の文様を組み合わせて描いた。「銀河鉄道の夜」では、星座や天の川、星空、鉄道を自身の感覚で表現した。「星の王子さま」では、有名な「一番大切なものは、目に見えない」という言葉を題材にした。主人公にその言葉を伝えるシーンの中で展開するという風に作り上げた。「物語を知っている人が作品を見て、九谷焼に興味をもってもらえるきっかけを作りたい」と振り返る。

これまでの制作とは異なる新しい挑戦だった。自分一人でやっている、絶対にやらなかったことに取り組んだ。さらに、こういった地域性を大事に



上端さんの作業道具

プロジェクトを通じて印象に残ったのは、小山氏の「ここは実験室です。そして、ここにいるメンバーは仲間です」の言葉だ。この言葉に触発され、他地域の匠とのコラボレーションもできた。千葉県の匠で「江戸つまみかんざし」作家の藤井彩野さんと「不思議の国のアリスの世界をモチーフに「アロマディフューザー」を制作した。全国の匠とつながりができ、この先、色々なことを一緒にやれるメンバーが増え、横のつながりが一気に広がった。自身のモノづくりに対する考え方の幅も広がった。今回の制作を機に、九谷焼の魅力伝える気持ちを新たにするとともに、自身の作品を発展させるために、創意工夫に情熱を傾ける。



工房を訪れ、アドバイスする下川氏

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



制作に取り組む上端氏



上端 伸也
石川／九谷焼作家

石川県金沢市生まれ。石川県立工業高等学校 工芸科、石川県立九谷焼技術研修所に陶芸を学ぶ。卒業後、九谷焼窯元に11年勤務。2016年に独立、現在自宅にて制作。日展 入選(2013年～2017年)、日本現代工芸美術展 現代工芸新人賞(2014)、現代工芸大賞(2016)、現代工芸本会員賞(2018)。

日本現代工芸美術家協会 本会員、石川県美術文化協会 会員。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT